

学際的研究と林学

—日本熱帯生態学会・第一回年次大会に参加して—

井 上 真

1. 日本熱帯生態学会とは

日本熱帯生態学会は、1990年7月22日に設立総会を開いたばかりの新しい学会である。学会員に配布されるニューズレターによると、「熱帯林の急速な破壊、熱帯地域における環境の破壊への対処と関連して、熱帯研究が今ほど注目をあびたことは、かつてありませんでした」という背景のもとで次に示すような設立趣旨が述べられている。「日本の熱帯研究は、かなり古い時代までさかのぼることができます。しかし、組織だって研究が始まったのは、ようやく1960年ころになってからです。……日本人による個々の研究成果には国際的にもすぐれたものがみられますが、研究者間の相互交流や討論という面では、国内にかぎっても、十分であったとはいえません。研究者相互間の交流を促進することによって、重要な研究の方向を見定めるための討論をうながし、また研究成果発表の場を確保して、いっそうの研究の発展をはかることが急務です。」このような社会的な要請に応えるために設立されたのが日本熱帯生態学会である。

対象としては、「生物過程が主体となった自然生態系に注目するだけでなく、自然を組織している社会的なしくみ」にも目を向け、より広い視野をもって熱帯研究成果の相互交流をはかろうというものである。

筆者のような社会科学系の研究者が、この学会に入会した理由はここにある。

2. 学際的研究

とはいえ、やはり発表の大部分を占めた植物生態学、土壌学、昆虫学、などの自然科学系の研究発表内容を理解するのは、筆者にはとうてい不可能であっ

INOUE, Makoto: Interdisciplinary Researches and Forest Science — The 1st Annual Meeting of the Japan Society of Tropical Ecology
東京大学農学部

た。

熱帯生態学会の発展を願う者の一人として、自分自身の不勉強を反省すると共に、この学会の行く末を案じざるを得なかった。研究対象が熱帯の生態系（社会生態系）であるという共通項はあるものの、もしかすると互いの研究内容を十分に吟味しきれないのではないか、という不安である。

これは、とりもなおさず現時点における学際的研究の一面を表している。特に熱帯生態系の研究においては、学際的研究の重要性を否定する者はいまい。熱帯林の減少問題一つ例にとっても、それは明らかである。つまり、植物生態学、動物生態学、昆虫生態学、土壌学、経済学などのディシプリンが、個別、分散的に熱帯林を取り扱っても、それはあくまでも個別学問分野内での成果にとどまる。まさに象の尻尾を見て、象は細長いと言うに等しい。

さて、理想的な学際的研究とは、生態学や経済学などいくつかのディシプリンを完璧にマスターした一人の研究者によって為される。この場合、一つのディシプリンの価値を1とすると、二つのディシプリンを修めた者による学際的研究の価値 V は、 $V > 2$ となる。しかし、実際は一人の研究者がいくつかのディシプリンを「完璧」にマスターするのは不可能に近く、おそらく $V < 2$ となるであろう。これならば、異なるディシプリンをマスターしている研究者二人でアプローチする方がよい成果が得られる。なぜなら、この場合の価値は、 $V = 2$ であるからだ。現在の教育制度のもとでは、理想的な学際的研究は、世紀の大天才の登場を待つしかないのかも知れない。

このような理由から、当面の学際的研究は、異なる学問分野の研究者による共同研究という形をとらざるを得ない。それをステップとして、より理想に近い学際的研究へともっていくのが現実的である。

このような考えかたが妥当であるかどうか、また、学際的研究が可能であるかどうかは、日本熱帯生態学会が証明してくれるであろう。もしも、日本熱帯生態学会が生態学会のミニチュア版の様な状態になってしまうならば、人文・社会科学系の研究者は入会するはずもなく、学際的研究への挑戦は挫折に終わるであろう。私自身は、日本熱帯生態学会に大いなる意義を感じており、そうになって欲しくないと願っている。そのためには、研究者に少なくとも他分野の発表を理解できるだけの基礎知識が要求される。

3. 林学研究者の役割

林学のカリキュラムには、生態学、植物学、動物学、経済学、砂防工学、経

営学、などが含まれている。この意味で、林学というのは、そもそもが学際的研究を特徴としていたといえる。私の理解では、林学（あるいは森林科学）とは、森林を対象とした学際的アプローチをする学問分野である。当然、先の例から明らかなように、理想的な学際的研究は不可能に近く、林学研究者は植物学、工学、経済学など、それぞれ自分の得意分野を有する。

そこで、例えば、生態学と経済学を例にとって、林学研究者による学際的共同研究の有利性を示すと次のようになる。生態学プロパーと経済学プロパーによる共同研究の価値は、 $V=2$ である。これに対して、森林生態学研究者は林業経済学（森林社会学）を学んでいるし、林業経済学研究者は森林生態学も学んでいるので、彼らによる共同研究の価値は、 $V>2$ となる。林学研究者による学際的共同研究は、このような有利性を本来もつはずである。したがって、熱帯林研究において、林学プロパーは、林学内部の学際的共同研究によっても優れた研究成果を得られるはずであり、日本熱帯生態学会においても、林学プロパーの果たす役割は極めて重要となろう。

しかし、上に述べたことはあくまでも理想論でしかない。現実とのギャップはくやしいほど大きい。林学研究者自らが林学を侮蔑し、自分は林学プロパーではなく、〇〇学研究者であると主張する場面にしばしば出くわすが、その度に心が痛む。それなら、林学としてまとまっている必要性はまったくないではないか。

熱帯林問題が世間の注目を浴びている今、林学研究者による学際的共同研究は、世に林学をアピールし、また林学のさらなる発展を図る有効な処方箋たりうと思う。他の学問分野の研究者との交流を深めつつも、林学内部の学際的共同研究の意義を再確認しようではないか。

日本熱帯生態学会第一回年次大会は、私に学際的研究と林学について考えるきっかけを与えてくれた。大会そのものの紹介は、能力不足ゆえ不可能でした。